

第 1 部 モーツァルトが楽しんだ庭園ライフ:解放される〈庭園〉

モーツァルトが生きた 18 世紀後半。それは、王侯貴族等の特権階級が所有する私的な、そして閉ざされた庭園が、進歩的な君主によって、一般の人々にも解放されていった時代だった。またそのような解放された庭園を舞台に、やはり特権階級の独占物だった様々な形の音楽の楽しみが、一般の人々のものとなってゆく……。

モーツァルト(1756-91)の「交響曲第 39 番」も、こうした「解放された庭園」の 1 つ、ウィーンのアウガルテンでおこなわれた夏の野外演奏会で初演されたのではないか、という説がある。時は 1788 年。ちょうどモーツァルト晩年の困窮が顕在化し始めた頃で、この交響曲自体、初演の記録がないことから実演で取り上げられなかったのではないか、という見方がかつては一般的だった。だが最近では、当時のウィーンの野外演奏会ではプログラム冊子など、後世に証拠が残るような上演資料が印刷されるのはまれだったこと、またモーツァルトがこの曲を含む「後期三大交響曲」を最後まで完成させていることから、これら 3 つの交響曲が連続して初演されたのではないか、という考え方が浮上している。

時代は半世紀以上遡り、まだ庭園が特権階級の独占物だった頃のこと。庭園では宴会をはじめとする様々な催しがおこなわれ、結婚式など特別の機会には歌劇が上演されることもあった。ドイツ系音楽家としてはウィーン初の宮廷楽長として活躍したフックス(1660-1741)が、1723年に初演した歌劇《堅固と不屈》もその 1 つ。また歌劇とまではゆかずとも、宴を彩る野外演奏のために、屋外の演奏でも音量的に充分対応できる、管楽器を中心とした数々の「セレナーデ」が作られた。モーツァルトと同時代にウィーンの宮廷作曲家、宮廷楽長を歴任したサリエリ(1750-1825)の「セレナーデ」も、この流れに属す作品である。

ところで、ウィーンにおける庭園の解放に関して、その中心的存在となったのは、改革派君主として知られるハプスブルク家の皇帝ヨーゼフ 2 世(1741-90)である。そのヨーゼフが亡くなった際、彼の生前の業績を讃える作品が幾つも作られた。ヴァンハル(1739-1813)による《ヨーゼフ 2 世への追悼歌》もその典型であり、その第 2 部では、市民階級を中心とする多くの民衆のために、ヨーゼフが新たな光をもたらしたことが謳われる。

管楽器を主体としたアンサンブルが庭園で活躍する際には、流行りのオペラのヒット・ナンバーが上演されることもしばしばあった(またそれが、普段オペラハウスに行く機会のない一般の人々に、オペラが浸透するきっかけとなった)。オペラ改革者として名を馳せることとなるグルック(1714-87)が 1763 年に作った喜劇的な歌劇《メッカの巡礼》もその 1 つ。中近東風の異国情緒に溢れたナンバーも登場する。

18 世紀前半、ウィーンを中心街の外側に建てられたベルヴェデーレ宮殿でも、この世紀の後半になると庭園が一般に解放され、野外演奏会がおこなわれるようになった。そうした中で、

当時話題を呼んでいた多くの音楽家の作品が次々と上演されてゆく。ハイドン(1732-1809)の「交響曲第 83 番」をはじめとする、いわゆる「パリ交響曲」ばかり。現在では忘れられてしまった存在だが、当時は名ヴァイオリニストとして有名だったメストリーノ(1748-89)の作品も、ベルヴェデーレの庭園演奏会で人気を博した。本日はそんな彼の作品の中から《ロマンツェ》をお聞きいただく。

ベートーヴェン(1770-1827)も、庭園での演奏会と因縁浅からぬ関係にあった。たとえば 1800 年にウィーンの宮廷劇場で初演され、人気を博した「ピアノ協奏曲第 1 番」は、アウガルテンの庭園内に造られたホール兼レストランでも 1806 年に取り上げられ、この時は彼の弟子であり名ピアノ教師としても知られるチェルニー(1791-1857)がピアノ独奏を務めた。

(小宮正安)

第2部 公園に流れるワーグナーのオペラ:庭園から〈公園〉へ

ワーグナーが生きた19世紀のヨーロッパは、地域的な差こそあれ、市民階級が台頭を遂げた時代である。そうした状況の中で、市民が主体の街づくりがおこなわれてゆくにあたり、誰もが集うことのできる「公園」が発明されてゆく。しかも公園こそは、誰もが様々な音楽に触れられる集いの場として、音楽史にも重要な役割を果たしていった……。

「未来の音楽」を標榜する斬新なオペラだけでなく、私生活においても社会現象をまき起こし続けたワーグナー(1813-83)。ただし彼の音楽は、オペラハウスだけで上演されていたわけではない。特にウィーンでは、むしろ野外演奏会を通じて、普段オペラに接する機会のない人々の耳にその音楽が届き、ワーグナーの知名度が確実に上がってゆくこととなった。1850年に初演された歌劇《ローエングリン》も、その数々の名ナンバーとともに、野外で演奏されて広く知名度を得ていった作品の一つである。

オーストリアでは20世紀初頭まで帝政が続いていたため、市民の社会進出は比較的遅れていたものの、例えば、オーストリア皇帝フランツ1世(1768-1835)は、ナポレオンの軍事侵攻で壊された王宮協の土塁の跡地に庭園(「フォルクスガルテン」)を造営。それを解放し、以降は市民が主導する形で公園としての活用が進められていった。そんなフランツを讃えるべく、元々ハイドンが作った皇帝賛歌を1831年にアレンジしたのが、ピッチェ(1786-1858)の「〈神よ、フランツを護りたまえ〉によるフーガ」。いっぽう、フランツにとってのみならず、最終的にはウィーン市民の宿敵となったナポレオン(1769-1821)が失脚した際に、それを祝う大祭典が、この街の「解放された〈庭園〉」の象徴的存在でもあるプラターで開かれた。当日そこに鳴り響いたであろう音楽をも交えて、その様子を描写したのが、楽譜出版者としても名高いディアベリ(1781-1858)の「10月18日あるいは1814年のプラター軍事祭典」である。

フォルクスガルテンの演奏会では、先ほどのワーグナーをはじめ、若き日の彼が憧れたフランスのオペラ作曲家マイアベーア(1791-1864)のオペラの名ナンバーも上演された。1849年にパリで初演された歌劇《預言者》も、「戴冠式行進曲」をはじめとして大人気だった。またマイアベーアとほぼ同時代のパリを生きたオッフエンバック(1819-80)の作品も、フォルクスガルテンの演奏会では花形だった。しかもオッフエンバックの場合は、荘重かつ長大な「歌劇」ではなく、肩の凝らない楽しい内容の「喜歌劇」のエキスパートだったため、庭園の演奏会にはうってつけだった。本日は、1866年に初演された喜歌劇《青ひげ》の名旋律を、ウィーンのダンス音楽家として名高いツィーラー(1843-1922)が、カドリールの形でまとめたものをお聞きいただく。

ツィーラーのいわばライブであり、当時のウィーンのダンス音楽界のスターの1人だったのが、「ワルツ王」ヨハン・シュトラウス2世の弟のヨーゼフ・シュトラウス(1827-70)である。しかも彼は、自身や兄弟の作ったダンス音楽を舞踏会で指揮するだけでなく、自らの楽団を率いてフォルクスガルテンで演奏会を開き、同時代の作曲家(それこそワーグナーやマイアベーア

やオッフェンバック)の最新作を次々と取り上げた。そんなヨーゼフが、これら最新作の影響を受けつつ 1864 年に作曲し、フォルクスガルテンで初演したワルツ《オーストリアの村燕》を、ピアニストのシュット(1856-1933)が超絶技巧のパラフレーズとして編み直した作品を、今回は取り上げる。

ヨーゼフが注目し、フォルクスガルテンの演奏会で広めた作曲家の 1 人が、ワーグナーと並び「未来の音楽」の象徴的存在と見なされていたリスト(1811-86)。超絶技巧を誇る自作のピアノ曲を基に 1851 年に交響詩として改訂した《マゼッパ》も、フォルクスガルテンの演奏会で、ヨーゼフの指揮によって鳴り響いた作品の 1 つだった。

(小宮正安)

第3部 シュトラウス風・ウィーンのおもてなし:公園で〈博覧会〉を

「公園」が19世紀ヨーロッパ市民社会の発明品であったように、市民が主役となった都市や国家がその力を世界に向けて示すことを目的に生まれた「万国博覧会」も、19世紀に発明された。1873年、ウィーンのプラターでもロンドンやパリに次いで、ついに万博が開かれる。またその中でも重要な役割を果たしていたのが、「音楽」だった……。

ウィーン万博の開催にあたっては、現在で言う「万博ソング」あるいは「万博ナンバー」が何曲も登場する。その1つこそ、ウィーンが世界に誇る「ワルツ王」として有名なヨハン・シュトラウス2世(1825-99)が1873年に書き下ろしたワルツ《わが家で》だ。今回は、オリジナルの男声合唱版での上演となるが、「我が家にいるように、どうぞくつろいで我らがウィーンをお楽しみください」という内容。このようにシュトラウスのワルツは、踊りのためだけでなく、聴くためのジャンルとなりつつあった。

ウィーン万博では、ヨーロッパ諸国の中でも特にオーストリアが長年にわたって展開してきた文化政策の結晶の数々、特に音楽が、展示やイベントにおいて重要な位置を占めていた。開幕に際して、これまたウィーンの代表的音楽家であるブラームス(1833-97)が、自ら芸術監督を務めるウィーン楽友協会の管弦楽と合唱団を指揮し、1747年にロンドンで初演されたヘンデル(1685-1759)の祝典的なオラトリオ《ユダ・マカベウス》の一部を上演したのもその1つ。また、ブラームスのライヴァルと見なされていたブルックナー(1824-96)も、万博の閉幕関連事業の一環としてウィーン楽友協会大ホールで催された演奏会で、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団を指揮し、自作の「交響曲第2番」を演奏して、好評を博している。

このように、ウィーンを代表する音楽組織である楽友協会やウィーン・フィルの協力の下、ウィーン万博ではこれまでの万博にはない、音楽万博としての特徴が前面に押し出された。それをさらに継承拡大したのが、ウィーン万博の際にプラターに造られた巨大なパヴィリオンをメイン会場として、1892年に開催された「ウィーン国際音楽演劇博覧会」である。この博覧会を取り仕切ったのは、外交官夫人としてヨーロッパのそこかしこにコネクションを築いていたメッテルニヒ侯爵夫人(1836-1921)。名門貴族の一員であった彼女は、音楽文化に造詣が深く、数々の音楽家とも交流を深め、場合によっては経済的、社会的支援を惜しまなかった。フランスのサン＝サーンス(1835-1921)も夫人の知遇を得た一人であり、1862年に作られた「マズルカ 第1番」は、彼女に捧げられている。

いずれにしても、1892年にウィーンで開かれた、音楽と演劇をテーマにした世にも珍しい国際博覧会では、「音楽の都ウィーン／音楽国家オーストリア」を象徴する様々な展示や、屋内屋外で数多くの演奏会が催された。ウィーンゆかりのシューベルト(1797-1828)の劇付随音楽《キプロスの女王ロザムンデ》(1823年)や、やはりこの街を代表するブラームスが若き日(1857～60年)に作曲した「セレナード第1番」は、親しみやすく肩の凝らない作品として、この国際博覧会のいわば定番だった。

この博覧会では、スメタナ(1824-84)が 1866 年に完成・初演した歌劇《売られた花嫁》も上演されている。スメタナは、オーストリアに支配されていたチェコの独立運動に掉さした音楽家として有名であり、この歌劇もその一環として作られた。そうした社会状況を背景に、ウィーンでもチェコ人に対する反感や排斥が起こりつつある中で、その流れを作った作曲家の歌劇が、しかもチェコ語で上演される。まさに音楽が、政治的民族的対立を超える重要な存在として用いられた 1 つの大きな証に他ならない。

(小宮正安)